



こがわ まさふみ
古川雅文
生徒指導実践開発コース
教授

このページでは日本学術振興会の科学研究費助成事業で採択された研究を紹介いたします。同助成事業は、全ての分野の「学術研究」を格段に発展させることを目的に、独創的・先駆的な研究に対して助成を行うものです。基盤研究、挑戦的萌芽研究、若手研究などに分かれており、基盤研究は1人または複数の研究者が共同で行う研究が対象。研究期間は3～5年です。

教職キャリア発達の観点から見た 現代の教員に必要な資質能力に関する研究 (平成23～25年度科学研究費助成事業・基盤研究に採択)

「教員にはどのような資質能力が必要か」という

ことは、教員を養成する大学の研究者はもとより、教員自身も知りたいことでしょう。本研究はこのようなテーマに正面から取り組んだものです。

本研究では特に二つの時間の流れに焦点を当てました。一つは時代の変化です。現代は名実ともに新しい時代に突入しているといえます。情報化社会、グローバル社会といわれる現代の教員には、昔とは異なる新しい資質能力を備えることが求められているのではないのでしょうか。

もう一つは個々の教員のキャリア発達です。教員養成を終えて教員となり、新任、若手、中堅、ベテランと経験を重ねるにつれ、必要・重要とされる資質能力は変化していくと考えられます。

ここでは兵庫教育大学大学院の修了生のうち、主として現職教員を対象とした調査研究の結果の一端を紹介いたします。約3000人を対象に

郵送でアンケート調査を行い、1000人を超える方々から回答を頂きました。ご回答を頂いた方々に心から御礼申し上げます。

教員の資質能力として必要と思われる代表的な19項目の目を三つ選んでもらった結果、「授業実践の知識・技術」「子どもを理解し共感する力」「子どもの変化に気づく力」「学級経営・クラス運営の力量」「保護者との連携・保護者対応」が票を集めました。これらは学校教育の根幹、および問題対応に直結する能力だと思われます。逆に、情報リテラシーや英語、進路指導・キャリア教育といった現代的な要素はあまり重視されていませんでした。

また、教員自身が求める資質能力は、彼らのキャリア発達に伴って変化していくことが示されました。【グラフ】は、今後10年間で伸ばしたいと思っっている資質能力を三つ選んでもらった結果です。経験年数によって5群に分け、数値はその項目を

重要として挙げた人の割合を示しています。

このグラフから、教育経験5年未満の初任者段階では授業実践力や学級の資質能力を高めたいという要求が強いことが分かります。経験10年以上の中堅段階になると、生徒指導力や保護者との連携・対応といった問題対応能力がより求められるように見えます。また、行事等の企画力や学校経営能力の重要性に気付くようになるようです。さらに、経験20年以上のベテランになると、地域連携などの力量を求めるようになってきました。

【グラフ】教職経験年数ごとの今後伸ばしたい資質能力 (3つ以内の重要な項目として選んだ者の割合)

